報告

2013 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

日置善郎[1)]　川野卓二[2)]　宮田政徳[2)]　吉田　博[2)]　上岡麻衣子[2)]
[1)] 徳島大学大学開放実践センター
[2)] 徳島大学教育改革推進センター

要約：全学 FD 推進プログラム第四期の最終年の FD 実施報告を行う。今年度から，全学 FD 推進プログラムは新しい体制の下で実施されることとなった。即ち，FD を実施する部局「教育改革推進センター」が新設され，さらに従来大学教育委員会の下に置かれていた FD 専門委員会が独立し，全学委員会「FD 委員会」が設置された。今年度実施されたプログラムは，「FD ファシリテーター養成研修」，「教育力開発基礎プログラム」，「授業コンサルテーション・授業研究会」，「FD・SD セミナー」，「大学教育カンファレンス in 徳島」，「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」である。各プログラムについて概要を記載し，アンケート結果から成果と今後の課題について考察する。
（キーワード：初任者研修，FD ファシリテーター養成研修，授業コンサルテーション，FD・SD セミナー，大学教育カンファレンス，ティーチング・ポートフォリオ）

An annual report 2013 on campus wide Faculty Development programs at The University of Tokushima

Zenro HIOKI[1)]　Takuji KAWANO[2)]　Masanori MIYATA[2)]
Hiroshi YOSHIDA[2)]　Maiko KAMIOKA[2)]
[1)] Center for University Extension, The University of Tokushima
[2)] Center for the Enhancement of Teaching & Learningthe,The University of Tokushima

(Key words: new faculty seminars, FD facilitator training seminars, individual consultations, education conference)

1. はじめに

全学 FD 推進プログラム第 4 期の最終年となる今年度も推進活動は計画に基づいて粛々と進められたが，プログラムの外枠である実施体制には大きな変化があった。まずは，この「新体制」について紹介しておこう：

(1) 新センター設置

昨年度まで大学開放実践センターに所属していた FD 担当教員は，新設された「教育改革推進センター」の所属となった。この，いわば「FD 部門の分離・独立」は，FD 推進活動が単に大学開放実践センターという一部局の活動ではなく全学活動であることを学内外に明確に示すために必要な改革として，数年来の懸案事項となっていたものである。

(2) 新委員会設置

もう一つの変化は，FD 推進活動を全学的に支えるために大学教育委員会の下に置かれていた FD 専門委員会に替って，大学教育委員会から独立した全学委員会「FD 委員会」が設置されたことである。この新委員会には，FD 基盤強化のため教育担当副学長ならびに学務部長も正式な委員として加わっている。

この二つの措置により本学の FD 推進体制は大きく前進したと言えよう。

それでは続いてプログラムの中身である FD 推進活動を概観しよう。今年度も 2012 年度に引き続き，FD ファシリテーター養成研修，教育力開発基礎プログラム，授業コンサルテーション・授業研究会，FD・SD セミナー，大学教育カンファレンス in 徳島を計画通り実施し，さらに３月には，昨年度に引き続き３回目となるティーチングポートフォリオ作成のためのワークショップ（３日間）を開催した。

各プログラムは，「初任者研修」としての『教育力開発基礎プログラム及び授業コンサルテーション・授業研究会』，「学部 FD 実施者向け」の『FD ファシリテーター養成研修』，「話題提供者を囲む

懇談の場」としての『FD・SD セミナー』,「特色ある教育実践・研究発表の場」としての『大学教育カンファレンス』,「教員が教育力を高める為に自らの教育活動を振り返る機会」としての『ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ』と位置づけられており，全体の体系性にも配慮して運営されている。

また，FD ファシリテーター養成研修は SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）に開放され徳島大学外からの参加者も受け入れており，同様に，教育力開発基礎プログラム，FD・SD セミナー，大学教育カンファレンス in 徳島，ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップも SPOD 開放プログラムとしている。

これらのプログラムは，アンケート結果等から見て一定の成果を上げ前進しているとは判断できるものの，まだまだ教員全体に FD 推進の重要性が浸透しているとは言い難い状態というのも事実である。各学部・部局長，さらには学長・役員会にも協力を仰ぎ，同プログラムがより有効なものとなるよう今後も努めていきたい。

以下，2〜7 において，今年度の各プログラムの実施内容を具体的に述べる。

2. ＦＤファシリテーター養成研修

a. ねらい

2011 年 2 月の大学教育委員会において「徳島大学 FD 推進プログラム第 4 期計画（20011/4-2014/3）」が決定され，これに基づき年度ごとに「FD 推進プログラム年度計画」を策定の上，FD 活動を推進することとなった。2013 年度は第 4 期計画の最終年の三年目にあたり，昨年度の成果と反省に基づき，その内容を改善した上で，2013 年度 FD 推進プログラムの一環として「FD ファシリテーター養成研修」（合宿ワークショップ研修）を実施した。

このプログラムの目標は次のとおりである。

①FD 活動の理念と活動計画を理解する。
②自校の FD プログラムを開発する。
②FD リーダーとして活動できる能力と資質を体得する。
③FD リーダー間の仲間づくり, FD ネットワークづくりをする。

対象者は，共通教育センター及び各学部から FD 企画を立案・実施する立場の教員（FD 委員会委員等）及び中堅以上の教員２名以上とした。その他，昨年度から T－SPOD（徳島県下 FD ネットワーク）参加校及び SPOD 加盟校にも参加者を拡大した。プログラム内容は，FD ニーズの把握から企画の立案及びプログラム評価の方法までを，レクチャーとワークショップを通じて体得し, FD 企画の立案能力を向上させることを目標とした。これまで以上に，明確な目標を設定し，実践的内容をもったプログラムを実施した。

b. 概要

■開催期日
2013 年 6 月 22 日（土）〜6 月 23 日（日）
■会場
独立行政法人「国立淡路青少年交流の家」
（兵庫県南あわじ市阿万塩屋 757- 39）
■参加者

【学部 FD 委員等】

氏　名	所　属	職　名
小山普之	総合科学部	教　授
佐藤高則	総合科学部	准教授
近藤茂忠	医　学　部	准教授
池田康将	医　学　部	准教授
岩本　勉	歯　学　部	教　授
濱田賢一	歯　学　部	教　授
柏田良樹	薬　学　部	教　授
難波康祐	薬　学　部	教　授
出口祥啓	工　学　部	教　授
石田　徹	工　学　部	教　授
宮崎隆義	全学共通教育ｾﾝﾀｰ	教　授
山本真由美	全学共通教育ｾﾝﾀｰ	教　授

【SPOD】

氏　名	所　属	職　名
水野貴之	徳島文理大学	准教授
田上隆徳	新居浜工業高等専門学校	准教授

■運営メンバー

氏　名	所　属	職　名
高石喜久		副学長
日置善郎	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	センター長
羽地達次	歯学部	教　授
川野卓二	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	教　授
宮田政徳	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	准教授
香川順子	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	准教授
吉田　博	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	助　教
奈良理恵	学務部教育企画室	FD ﾏﾈｰｼﾞｬｰ
三好信幸	学務部教育企画室	室長
河野博子	学務部教育企画室	係長

■内容

２日間にわたって表１のプログラムを実施した。

c. 成果と課題

プログラム終了直後にとった，参加者へのアンケート結果を示す。以下に，各問いに対する自由記述の回答例を挙げる。

(1) 今回の FD ファシリテーター養成研修に参加するにあたってあなたの自己目標はなんですか？身につけたいスキル・知識は何ですか。

・校内で，研修を開くことができる様，スキルを身に付けたい。
・基礎的な知識と，ファシリテーターとしての基本的なスキル習得。
・学部や共通教育 FD の効果のある企画を立て実践するスキル等を学ぶ。
・まず，FD について正確に知ること。何となくしっているが，中身がわかってない。
・FD ファシリテーターについて理解する（勉強する）。
・実施内容や方法（進め方）やファシリテーターの役割について知ること。
・創造性のある教育を実践したいと考え，参加しました。
・FD ファシリテーターとは何かを理解すること。
・FD について理解を深める。
・初めての研修の為，FD ファシリテーターの意義について学びたい。

・学部企画の FD への教員の参加率を上げること。そのための具体的アイデアになりそうな情報の収集と実践へ向けての工夫。
・FD を実質化（学生のための FD）するにはどうしたら良いのか。
・スキルの向上。
・教育とは何かを再確認するため。
・新たな FD 活動の可能性の発見と交流。
・新しい手法，技法を学ぶ。新しい機器の情報を集め導入を検討する。さらに周りの教員に意識をもってもらう方法を学ぶ。

(2) 今回の研修に参加して身に付いたと思われることは何ですか。

・大学での事例を実感できた。
・プログラム作成の実際。
・FD ネットワークが形成された。また FD 企画の作成法を会得したし，他学部，他大学の現状が理解できた。
・FD に関しては，普段からの問題を見つけることを心掛ける必要があると感じた。また，プログラム作成についても勉強することができた。
・FD そのものについての理解。
・評価の仕方やプログラム構成の考え方。
・多くの部門の方からの意見を伺うことができ，FD を幅広く認識できた。
・いろんな人に出逢えたことや大学全体の教育改革の状況がよくわかった。
・FD 制度の良さと現実的限界。
・いろいろな人がいろいろな考え方を持っているということがわかった。
・プログラムシート，評価シートの使い方。
・評価方法とこれを用いることで客観評価を高められる可能性，又これまで行って来たことに自信が持てた。さらに目的，成果の設定方法が分かった。

表 1 2013 度ＦＤファシリテーター養成研修日程

第 1 日（2013 年 6 月 22 日・土曜日）

8:30 徳島大学集合

8:40 徳島大学出発

9:40 国立淡路青少年交流の家到着

時　刻	内　　容	講師・担当者	場　所
9:40－10:00	・記念写真撮影，部屋の確認	研修事務局	特別第 1 研修室
10:00－10:30	(1) オリエンテーション ・FD への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	副学長（教育担当） 高石喜久 ＦＤ委員会委員長 日置善郎 （進行）川野卓二	特別第 1 研修室
10:30－11:40	(2) アイスブレーク（ＦＤファシリテーターとは何かを考える）	吉田博	特別第 1 研修室
11:40－12:40	昼食（11：50～12：20）　休憩		食　堂
12:40－13:20	(3) 講義：FD 概論（定義と種類）	宮田政徳	特別第 1 研修室
13:20－13:50	(4) 講義：部局 FD 紹介 ①：医学部 FD ②：共通教育 FD	池田康将 山本真由美	特別第 1 研修室
13:50－14:00	休憩		
14:00－14:30	(5) 講義①：FD ニーズ把握と課題発見 （意識調査アンケートから見えて来ること）	川野卓二	特別第 1 研修室
14:30－17:50	(6) 講義＆ワーク②：FD プログラム開発 ・研修実施要項作成 ・研修日程作成 （適宜コーヒーブレークをとる）	香川順子 他スタッフ全員	特別第 1 研修室
17：50－18:30	夕食（18:00～18:30）　休憩		食　堂
18：30－19:30	自由時間		
19：30－20:30	(7) FD 交流会	吉田博	食　堂
20：30－22:30	風呂他　（入浴時間 21:30～22:00）		浴　室

22:30 就寝及び消灯

第 2 日（2013 年 6 月 23 日・日曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者	場　所
7:00－7:20	朝のつどい		つどいの広場
7:20－8:30	朝食（7：45～8：10）　掃除（点検・退室）		食堂・宿泊室
8:30－9:10	(8) 講義＆ワーク④：FD プログラム評価シート作成	川野卓二	特別第 1 研修室
9:10－10:20	(9) ワーク⑤：FD プログラムの仕上げ	スタッフ全員	特別第 1 研修室
10:20－10:30	休憩		
10:30－12：10	(10) ワーク⑥：FD プログラム発表 （質疑・応答とコメント）	ＦＤ委員会副委員長 羽地達次 川野卓二，吉田博	特別第 1 研修室
12：10－13:00	昼食(12:20～12:50)　休憩		食　堂
13:00－13:30	(11) ワーク⑦：FD プログラム発表 （質疑・応答とコメント）	ＦＤ委員会副委員長 羽地達次 川野卓二，吉田博	特別第 1 研修室
13:30－14:30	(12) プログラムのまとめ ・参加者からのワークの振り返り ・副学長からの講評 ・FD 委員会副委員長からの参加証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	副学長（教育担当） 高石喜久 ＦＤ委員会副委員長 羽地達次 ＦＤ委員会委員長 日置善郎 （進行）宮田政徳	

14:40 バス発車 － 15:40　常三島キャンパス着，解散

(3) 参加して良かったと思われる点は何ですか。

・人的交流ができた。
・他学部との交流も重要で，よかった。
・自分の能力・知識向上に役立った。また内容が充実できた。
・他学部，他大学との教員との交流が出来たことは勉強になった。
・何となく思っていたことや考えていたことを表現する機会を得て，すこし明確にすることができた。
・人との新たなつながりができたかも。
・徳島大学以外からの参加もあり，異なった取組みや対応などを学ぶことができた。
・FD ファシリテーター養成研修は初めての参加で学ぶ点が多かった。
・学部の垣根をこえて，FD 研修を行えて良かった。今後 FD について，多少なりとも取りくむことが可能になると思う。
・他学部の教員と知り合うことが出来た。
・FD の運営と取り組みについて理解できた。また，他部局のことを知ることができてよかった。

・今年度の学部の FD 企画として，従来とは違った形式のものを実施できそうな点。
・仲間づくりや FD の具体例が作られた。
・ワークをすることで具体的な部分がよく理解できた。
・各部局の人達と共通話題で討論できたこと。
・交流，自らの活動についての考察ができた。
・同じような考えをもった部分では方向性の自信が持てた。また，異なる価値観，異なる視点，ことなる成果によって方法が異なる点も参考になったし，方法や考えは違っても学生のため，社会のためという視点を持てば結束できるという自信が持てた。

(4) 研修内容について改善すべき点があれば，具体的にお書き下さい。

・FD に関心を持っていない教員への意識浸透を図る義務化も必要。
・講演を手短にして，ワークの時間に余裕を持たせる方がよい。
・研修用資料がダブっているように感じたり，整えすぎのところがあったりするようと思いました。ご苦労様でした。
・企業の方の参加など，多面的な評価ができる企画があるとよいように感じた。
・宿泊は不要。ない方がよい。特にこのような貧弱な施設では疲労を溜めるばかりで，2 日目の研修が肉体的に辛かった。大学で朝から始めれば 1 日で完了可能ですし，その方が集中力も持続するはずです。
・中堅以上の教員を対照にするのに加えて，若手～中堅を対照としたプログラムも検討してもらえればと思います。
・もう少し時間をコンパクトにすれば良いかと思います。2 日目は昼までで良いと思います。
・できるだけ多くの教員が参加した方がよいと思う。
・宿舎をもう少し良い所に（予算があれば）。
・泊まりこんでやらなくてもできるのでは？6 月は学会シーズンでもあるので負担が大きい。全教員の教育に対する「意識」を改善する，もっと良い方法を考えて下さい。
・時間の取り方（作業量と講義）を工夫する。
・参加者への連絡事項が全て届いているかどうかの事前確認。
・困っている点などは具体的に相談するという参加方法もよいと思った。コーディネートや世話役の方の裏方は大変ですが，ディスカッションに参加するあるいは自らの意見の是非を問うなど，セッションによっては参加者という立場になってもらうことも重要ではないかと感じました。

参加者へのアンケートの他の項目の結果では，プログラムに関しての設問「研修の目的は明確に設定されていた」で，そう思うが 76%（前年度 47%），どちらかといえばそう思うが 18%（前年度 47%）であった。また会場に関しての設問「研修会場は快適な環境だった」で，そう思うが 53%（前年度 58%），どちらかといえばそう思うが 32%（前年度 37%）であった。運営に関しての設問「スタッフは手際よく研修を運営していた」で，そう思うが 71%（前年度 74%），どちらかといえばそう思うが 29%（前年度 26%）であった。ということで肯定的意見はほぼ前年度並であった。

以上より，この研修で各大学・学部・学科で FD を企画・実施する立場の参加者に対して，所期の目的を達成することができていると思われる。また，このプログラムのワークの中で，FD プログラムを作成することが FD ファシリテーターとしての自覚につながり，FD 担当者にとって有意義なワークになったと考えられる。尚この研修は今年度で所定の成果を達成し終えたと判断され，来年度からは廃止されることになった。

3. 教育力開発基礎プログラム

実質的な FD の取り組みを進めるため，徳島大学の教育の質向上及び問題解決のための相互交流と日常的な教育改善のための研修である「教育力開発基礎プログラム」を実施した。本節では，その研修内容について報告する。

a. ねらい

本研修は，大きく分けて授業設計と教育技術について学ぶものである。主な活動内容は，シラバスと授業計画の作成，模擬授業である。授業の目的，到達目標の設定，授業実施の留意点，評価方法等に関する講義やワークを通して，参加者が自身の授業について考え，振り返ることにより，実践的な教育力の向上を目指している。本プログラムの目標は以下の 4 つである。

①FD 活動の理念，活動計画を理解する。
②授業を計画し，実施し，評価する方法を体得する。
③授業研究の仕方を理解し，実践できるようにする。
④FD 参加者同士の仲間づくりをする。

b. 概要

■開催期日

2013 年 8 月 30 日（金）～2013 年 8 月 31 日（土）

■会場

共通教育 6 号館 201 講義室（大学開放実践センター2 階）

■対象者

本研修は学外（SPOD）へ開放しているため，学内のみではなく，学外の教員も対象としている。

学内の対象者は，学外より講師または准教授採用後 1 年以内の教員，及び学内で助教から講師または准教授昇任後 1 年以内の教員を中心とし，「教育力開発基礎プログラム」欠席者，推薦を受けた者（助教及び教授等）も対象としている。ただし，所属が学部系以外のセンター等，病院の場合，及びプロジェクト採用等の場合は除いた。また，次に該当する場合は参加を免除した。①学外で同様の研修を受けた場合，②担当する授業がない場合，③診療業務を主に担当している場合。

学外の対象者については，徳島県の大学・短大・高専（T-SPOD）及びその他 SPOD 加盟校の教員とした。

■参加者

今年度の参加者は，教員 18 名（徳島大学 16 名，SPOD2 名）であり，詳細は次の通りである。

【学内教員】

氏　名	所　属	職 名
青矢睦月	総合科学部	准教授
田中　佳	総合科学部	准教授
山口鉄生	総合科学部	准教授
佐藤　裕	総合科学部	准教授
村上敬一	総合科学部	准教授
田口太郎	総合科学部	准教授
川上竜巳	総合科学部	講　師
池田康将	医　学　部	准教授
安原由子	医　学　部	准教授
宮崎久美子	医　学　部	准教授
小野寺睦雄	医　学　部	講　師
増田清士	医　学　部	講　師
岡久玲子	医　学　部	講　師
湯浅恵造	工　学　部	准教授
吉田　稔	工　学　部	講　師
溝渕　啓	工　学　部	講　師

【学外教員（SPOD）】

氏　名	所　属	職 名
丸山広達	愛媛大学	助　教
稲元　勉	愛媛大学	助　教

■運営メンバー

運営メンバーは，副学長（教育担当），大学開放実践センター長（FD 委員会委員長），FD 委員会委員を含め，教員 14 名，職員 2 名，FD マネージャー1 名の計 17 名で運営を行った。

氏　名	所　属	職 名
高石喜久		副学長
日置善郎	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	ｾﾝﾀｰ長
小山晋之	総合科学部	教　授
山崎哲男	薬　学　部	教　授
上田哲史	情報化推進ｾﾝﾀｰ	ｾﾝﾀｰ長
堤和博	全学共通教育ｾﾝﾀｰ	教　授
羽地達次	歯　学　部	教　授
出口祥啓	工　学　部	教　授
金西計英	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	教　授
原田健太郎	評価情報分析ｾﾝﾀｰ	助　教
川野卓二	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	教　授
宮田政徳	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	准教授
香川順子	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	准教授
吉田　博	教育改革推進ｾﾝﾀｰ	助　教
三好信幸	学務部教育企画室	室　長
河野博子	学務部教育企画室	係　長
奈良理恵	学務部教育企画室	FD ﾏﾈｰｼﾞｬｰ

■内容

2 日間にわたり, 表 2 のプログラムを実施した。

■全体の流れ

[1 日目]

「(1) オリエンテーション」では，高石副学長より「大学教育，FD・SD への期待」について，日置 FD 委員会委員長より「研修のねらいと意義」についてお話を頂いた。

「(2) アイスブレイク」では，参加者間の交流と自己紹介のため,「忘れられない授業」をテーマに行われた。自己紹介カードを用い, 個人の授業, 研究を表すキーワード，性格等の特徴の他，学生時代に受けた授業について，良い授業，悪い授業を想起し，情報共有を行った。

「(3) ワークショップ　質の高い授業を目指すためには？（理想の授業と現状から授業の課題を探る）」では，自分が目指したい理想の授業を明確にすること，学生が能動的に深く学ぶために授業の中で注意すべきこと，現在の自分の授業における課題を明確にすることを重視して行った。「意義ある学習（Significant Learning）」や「深い学び（Deep Approach）」に関する理論を簡単に紹介し，自分にとって意味のあった学習経験から，理想の授業を明確にするためのワークを行い，各教員の経験について参加者間で共有した。

「(4) 講義・ワーク　より良い授業実施のために」では, 授業設計と評価に関する講義を行った。具体的には高等教育の状況や「教育実践を記録・顕在化し，それを教師同士が分かち，互いに吟味しあい，互いの教授・学習に関する実践的知識を積み重ねあう試み」として，SoTL（Scholarship of Teaching and Learning）[注3)] の考え方が紹介され，授業設計のための理論については,「意義ある学習（Significant Learning）」の 12 のステップが紹介された。その後，学習目標，評価方法，学習活動についてのワークを行い，個人の授業における授業設計と評価に関わる部分を再考した。次に，シラバス作成のポイントや授業計画書の書き方について講義を行い，参加者があらかじめ準備して持参したシラバス, 授業計画書の検討・修正を行った。その後，参加者間でシラバスを交換して相互にチェックを行った。最後に，模擬授業の説明を行った。

「(5) グループワーク　模擬授業・授業検討会」では，グループごとに各部屋に分かれて，参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員会委員が司会者として，教育改革推進センター教員がコンサルタントとして入り，支援を行った。模擬授業の内容と方法については，各自の専門科目の授業の或一コマの或一部分 15 分を, 研修前に事前準備を行ったうえで実施された。この模擬授業は, 昨年度同様コンサルタントが撮影して, その後の授業検討会ですぐに視聴しながらフィードバックを行った。参加者は学生の立場から模擬授業に参加した後，授業を検討するための要点チェックリストに基づき授業の検討を行った。この他にも良かった点，より良くするための提案について自由記述形式で用紙に記入し，模擬授業実施者へのフィードバックを行った。授業検討会は，このように参加者間がお互いに良い点，改善点について話し合いながら評価し合う活動として行われた。全員が模擬授業を終えた段階で，2 日目に全体で発表する代表者を選抜した。そのほか，司会，他グループの模擬授業代表者へのコメンテーター，タイムキーパーの役割を決定し，参加者が授業研究会を進行する役割を担う形式とした。

[2 日目]

「(6) 模擬授業実施」では，各グループにて選ばれた代表者が模擬授業を実施した。各班の進行については，シラバスや授業計画など授業紹介が 3 分，模擬授業実施が 15 分，コメント・質疑応答に 7 分, 交代 5 分の計 30 分をとって進めた。また，他の参加者やスタッフは，自由記述形式のコメントシートに良かった点，より良くするための提案についてコメントを書き，発表者へのフィードバックを行った。

「(7) プログラムのまとめ」では，教育改革推進センター川野卓二教員による研修のまとめ, FD 委員会副委員長の羽地達次教員による講評，今後の全学 FD 推進プログラムの紹介と日置 FD 委員会委員長による終わりの言葉によって締めくくられた。

c. 成果と課題

■プログラムの到達目標に関する成果と課題

［到達目標①：FD 活動の理念，活動計画を理解する］

全学 FD 活動に関する理念，各種活動については，(1) オリエンテーションでの高石副学長による「徳島大学の教育と FD への期待」と，日置 FD 委員会委員長による「研修のねらいと意義」において，全学的な教育方針，全学 FD 推進プログラムの目的とその意義，本研修の目的，意義について説明があった。また「(7) プログラムのまとめ」において，授業コンサルテーション・授業研究会，ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップについての説明もあった。これらの活動より，参加教員は徳島大学の全学 FD 活動について概ね理解したと思われる。アンケートに「FD の意義，目的を知れてよかった」とあるように，この研修によって理解が促進された事が窺える。

［到達目標②：授業を計画し，実施し，評価する方法を体得する］

授業計画，評価の方法については，Significant Learning（意義ある学習）を参考にしたワークを通して，自分の授業について具体的に考えたことにより概ね理解したと思われる。事前準備においては，シラバス，授業計画の作成のサンプルに，FD ハンドブック参照のポイントを示しつつ作成を促したため，参加者の理解は昨年より進んだようである。また，研修中にそのポイントを振り返るためのチェックシートを利用し，十分な時間を設けたことで，計画，評価の方法を伝えるのみではなく，日頃のシラバス作成の活動を振り返るための視点を意識化する機会を提供することができた。この点については，アンケートからも読み取れる。

［到達目標③：授業研究の仕方を理解し，実践できるようにする］

模擬授業の計画と準備，模擬授業の実践を通して，評価視点のポイントを示しながら，相互評価を行うことで，その理解が促されたと考える。模擬授業・授業検討会は，授業を実践するために必要な評価視点（枠組み）を伝えた上で，相互評価を行う機会を設けたものであり，体験的に授業研究の方法について理解できる機会であったと考える。また今年度より，映像フィードバックを用いて支援スタッフが本格的に関わることで，「授業コンサルテーション・授業研究会」への継続を意識した形で授業検討会を実施した。その方法を体験する機会を設けたことにより，参加者への気づきを促し，印象に残りやすい体験になったと考える。

［到達目標④：FD 参加者同士の仲間づくりができる］

研修全体を通して，できる限り相互交流の機会を設け，お互いに研鑽し合う関係性の構築を意識した研修を実施した。具体的には，アイスブレイクで，お互いの授業・研究等について情報共有する機会を設けたこと，ワークショップにおいて，理想の授業について話し合う機会を設け，授業に対する考え方を相互に理解するための機会を設定した。また，模擬授業・授業検討会と 2 日目の模擬授業においては，お互いの授業から学びつつ，相互に高め合う相互研鑽の関係性構築を促す機会とした。アンケートの「新たに人的なつながりをつくることができた」という質問に対して，全員が肯定的に評価しており，関係性の構築という視点からは，本研修の成果が確認されたと考えてよいだろう。今年度は前年度の反省から，グループ員以外のメンバーとの交流を目ざし，2 日目に弁当を食べながらの昼食会を開き，全体的に様々な教員との交流を行った。

■今後の課題

事後アンケートの結果から「研修は全体的に満足できるものだった」，「研修はシラバス作成のポイントや授業計画書の書き方について講義を行い，自分の業務に活かせる内容だった」，「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思う」という質問に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的に評価した教員がほとんどであった。これらの結果から，多くの教員にとって，よい学びの機会となり，自身の授業改善への契機となっていることが伺える。昨年度から

取り入れた画像を用いたフィードバックと支援スタッフの本格的な関わりは，参加者がこれまで得られなかった気づきを促すことができたと考えられる。

また,「研修内容をすぐに活用しなければならない状況で参加した」という教員は約半数（昨年は 3 割を切っていた）で，今年は半数近くが能力開発の必要性を感じている状態で参加し，授業改善に活かせたことを考えると，参加者にとってこの研修への参加の意義があったと推察できる。

研修会場の快適さについては，全員が肯定的に評価しており, 特に大きな問題はなかったようで, 特に設備面でも 95％の教員が十分だったと評価していた。「スタッフは手際よく運営していた」の設問では，全員が肯定的な評価をしている。

その他,「講師の用意した教材はわかりやすかった」について今年度は肯定的に評価した教員は 75％に止まっているので，教材作成については，評価結果をふまえた上で，よりよい教材へと改善を継続していく必要がある。

d. 初任者研修アンケート結果

最後に，プログラム終了直後に実施したアンケート結果について，自由記述の回答を示す。

(1) 現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。

- 学生にわかりやすい授業。
- 講義の進め方，話術。
- 魅力ある授業。
- 授業の組立て方 (全体, 各回の両面において)。
- 時間配分をきちんと考えるたり，有用なスライドと不要なスライドの整理，精査。
- 学生の興味を引くようなコミュニケーションの方法。話し方，態度など。
- 話術，ひきこむ話し方。スライド，プリントに内容を多くもり込んでしまうので，余計な部分を切りとる。
- 授業で話すテンポの調整。
- 授業を含めた, プレゼンテーション etc のスキル（いかに他人に伝えるか)。
- 資料の見やすさ，ポイントの押え所を伝えやすくする。
- 高等教育機関での授業手法（実践と研究を基盤としてオリジナリティなものをプレゼンするという事)。
- 対話方法，授業シラバス作成，授業案の作成の仕方。
- シラバス，授業計画作成は，今年度より実際，担当しているのでスキル必要性と学生のモチベーションをあげる講義。学生とのインタラクションを毎回取り込んだ講義の流れ。
- 英語力。
- 学生とのインタラクティブな授業の仕方。
- 話し方，資料の提示の仕方。
- 授業に関するハード面のスキル（パワポの扱いなど)。

(2) 参加して良かったと思われる点を，具体的にお書き下さい。

- 研修そのものも良かったが，様々な分野の人と会う機会としても良かった。
- 他学部の諸講義を見学でき，参考になった
- 他の先生の模擬講義を聞けた（受講できた）こと。とても参考になった。
- 色んな講義のスタイルを学んだ。知り合いが増えた。
- 他の先生の講義の一坦の拝見をできたこと。自分の授業のいいこと，わるいこと問わず，意見を言ってくれたこと。幅広い分野の先生に出会えたこと。
- 多人数の模擬授業を見て，目からうろこでした。また，授業を他者から客観的に良い点，悪い点をご指摘いただいたのも良かったです。
- 他の先生方，分野の授業をみて，興味を引くような話し方，スライド構成，学生とのかかわり方を参考にすることができて良かったです。
- 具体的にどこをどうなおせば，いい授業になるかを確認できました。(頭ではわかっていても，どうすべきかはなかなかだれも教えてくれないので。)
- 他の先生方の授業をたくさん聞けて参考になった。

・他分野の先生の授業をみることができ，自分の授業をすすめる上で，大変参考になりました。
・他分野の先生方との交流。授業方法（スライドの使い方，話の進め方）の聴講。
・学生への授業の仕方，評価の仕方など，様々な知識が得られた。他学科の授業内容や方法が分かり，今後の授業にすすめたい。
・自分の授業計画，講義について，見直し改善する機会になった。また他領域の先生方との出会い。
・ぼんやり苦手と思っていたことを明確に指摘してもらえた。また先生方の多様なとりくみ，とくに学生との密かなインタラクションを含むやり方が実際に行われていると知ることができた。
・細かいところまで指導を頂いてよかった。
・他の人の授業を見れたこと。
・他の教員の工夫や苦労を知ることができた点。また，グループ作業が自然にできるようにプログラムが工夫されていた点。
・教育改革推進センターの皆さんが，研修の成功のために頑張っておられる姿を見られたこと。

(3) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば，具体的にお書き下さい。

・上記のメリット（交流する機会）についても事前にもう少しアピールすると参加者も増えるのでは？
・開催時期を採用後早期にした方が良いと思う。学生ボランティアなど実際の学生を参加させて意見を聞くのが良いのでは。
・個人懇談的なものもあってもいいかも。
・事前に用意してある機材の説明をしていただけると良いかもしれません。
・予備知識がなく，１日目前半の講義が難しかったので，もう少し説明があれば良かったです。
・会場でどんな機材が使えるかを，前もって知りたかった。（PPT だけでなく），Web（ネットワーク），音響設備。
・前半の（初日の午後最初）講義は難解だったので，もう少し要点を絞って欲しかった。
・助教のころより，授業を行う機会があり，どのように行ってよいか分からず困った経験があります。対象者を助教まで広げても良いのでは。（授業担当者のみでも）
・もう少したくさんの人の講義を見聞きしたい。また，改善した後の模擬授業も行う。
・シラバスや授業計画のチェックは専門的知識が必要。もっと時間を割くかそのような知識のいらないチェック項目にする。
・模擬授業のみでも良いのではないか？
・スタッフの方の話の内容は，重要な点を扱っていたとは思うが，自分の言葉で話をしている方が少なく，なかなか入り込めなかったのが残念。また，アメリカの文献の引用が多かったが，大学の事情が違うので，適用が難しい面もあると思った。
・口頭やメールで各先生にお伝えしますので，何かの役に立てれば幸いです。

(4) その他，お気づきの点があればご記入下さい。

・とてもよい学び，出会いの場となり，ありがとうございました。
・授業の仕方を整理，分類する軸を考えられれば，自らの位置づけと過不足を認識しやすい。手抜きのようだが，テンプレートを見つける事ができる。
・夏休みに実施する必然性は分かるが，もう少し時期をずらせないか？講義時期から，あまり時間が空いていない方が望ましい。

4. 授業コンサルテーション

a. 授業コンサルテーションの目的

徳島大学では，全学 FD 推進プログラムの一環として，2005 年度より，毎年「授業コンサルテーション・授業研究会」という名称で実施している。授業コンサルテーションでは，個々の教員の実情に沿った具体的で日常的な FD をめざしており，その目的は，授業の把握，授業の改善，参加者間での授業技術の共有化である。対象は「教育力開発基礎プログラム」受講者を主な対象としているが，希望者も受け付けている。

表 2　2013 年度教育力開発基礎プログラム

第 1 日（2013 年 8 月 30 日・金曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者
9:00－ 9:30	・受付　（共通教育 6 号館 201）	－
9:30－10:00	(1)オリエンテーション ・大学教育，FD・SD への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	川野卓二（進行） 副学長（教育担当） 高石喜久 FD 委員会委員長 日置善郎
10:00－10:30	(2)アイスブレイク「忘れられない授業」 ・参加者自己紹介・交流	吉田　博
10:30－11:40	(3)WS「質の高い授業を目指すためには？」 理想の授業と現状から授業の課題を探る	香川順子
11:40－12:40	休憩　　各自で昼食	
12:40－14:45	(4)講義・ワーク「よりよい授業実施のために」 ・授業設計と評価 ・シラバス，授業計画書の検討・修正 ・模擬授業説明	川野卓二 宮田政徳 香川順子
14:45－15:00	休憩	
15:00－17:45	(5)グループワーク「模擬授業・授業検討会」 （3 人グループで実施） ・模擬授業の実施（撮影）一人 15 分以内 ・授業検討会 一人 10 分 →授業評価シート及びチェックリストを基に よかった点，改善点等を検討する ・2 日目の模擬授業代表者の選出と役割分担を決定	各班司会：FD 委員 ﾜｰｸ支援：ｽﾀｯﾌ全員

第 2 日（2013 年 8 月 31 日・土曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者
9:30－10:00	・集合，模擬授業準備 （教材印刷が必要な場合は 9:00 集合）	スタッフ
10:00－12:10	(6)模擬授業実施（グループ代表による模擬授業） A 班（9 :30-10:00），B 班（10:00-10:30） C 班（10:30-11:00） D 班（11:10-11:40），E 班（11:40-12:10）	司会：吉田　博 ｺﾒﾝﾃｰﾀｰ：FD 委員 支援：スタッフ全員
12:10－13:10	休憩　昼食(交流会)　＊全員参加	
13:10－14:15	(7)プログラムのまとめ ・模擬授業のまとめ ・講評 ・授業ｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝ，ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ・ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵについて ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	川野卓二 副学長（教育担当） 高石喜久 FD 委員会委員長 日置善郎

b. 授業コンサルテーションの流れ

授業コンサルテーションは，次の流れで進めている。

授業への参観・映像撮影・学生アンケートの実施
↓
授業記録作成・学生アンケート整理・映像編集
↓
授業研究会（発表・映像視聴・議論）

まず，センター教員と撮影担当者が，各教員の授業を参観し，簡単なメモ（授業内容のまとまり，時間経過，特筆するべき発言や出来事）をとりつつ，授業を映像に収める。授業終了時には，学生へのアンケート（その日の授業で何を学んだかということ，授業に関する先生へのメッセージについて）を実施する。さらに時間があれば，教員に授業に関する簡単なインタビューを行う。

その後，授業映像をもとに，センター教員が詳細な授業記録を作成し，それと平行して授業の主要部分の映像を編集する。授業記録は，時系列に沿って授業の展開過程（まとまり，何が話されているか，学生との相互作用，板書など）がわかるように作成した。編集映像は授業の展開が分かるように，各まとまりから数分間の映像を抽出し，合計で 20 分強になるようまとめた。さらに，授業より数週間後，授業記録や編集映像，学生アンケートの結果をもとにした「授業研究会」を開催する。そこでは，様々な部局からの参加者を交えて，授業改善の知恵を出し合い，また授業からいろいろなことを学び合うことを目指した。

c. 授業研究会

授業研究会は以下のような手順で進めた。所要時間は全部で 1 時間 20 分ほどである。これも昨年度と同様の手順である。

簡単な説明（授業全体のねらい／この日のねらいなど：対象者の先生より 5 分）
↓
授業映像視聴
↓
授業参観者報告・学生アンケートから読めること（教育改革推進センター教員より 5〜10 分）
↓
授業者解説（当日の様子／授業でうまくいっている点・お困りの点など各論：対象者の教員より 5〜10 分）
↓
自由討論（あるいは課題討論 10〜15 分）

2013 年度は 9 名の教員に対して授業コンサルテーションを行った。

また，2009 年 12 月より学部委員会との共催で，対象教員と同じ部局に所属する学部 FD 委員が常時授業研究会へ参加する形式となった。学部 FD 委員会との共催により，学部との連携を行いつつ，専門的な立場から教員が参加する形となり，専門的な視点からも議論する体制を継続している。

授業研究会では教育改革推進センター教員のほか，対象教員が所属する部局等からの参加がみられた。なお，授業研究会は，授業研究インテリジェントラボでの開催を主としていたが，2011 年度より，対象となる教員の所属部局での開催を推進し，同領域の教員が参加しやすい環境づくりを目指している。2013 年度の授業研究会は次の通り実施された。

●第 1 回 2013 年 8 月 1 日（木）10:00〜11：20
・開催場所：カンファレンスルーム（中央診療棟 4 階）
・授業担当者：堤保夫　准教授（大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）
・授業題目：『呼吸器コース　麻酔と呼吸生理/麻酔・疼痛治療医学』
・共催：医学部 FD 委員会
・内容：この授業では，呼吸器に関するガスの運搬について，学生に質問を投げかけながら進め，実際にパルスオキシメーターを使用して，学生の数値の計測する実演をしながら進められていた。自由討論では，学生に質問しながら進めることについて，一方的な授業にならないように工夫していることや，欠席や遅刻を防ぐための抑止力になっているということが話題に上がった。学生に投げかける質問についても，「なぜ？」を問うような質問をいくつか入れることができれば，学生が考

える機会になるということも共有された。また，実際の医療機器を使用して行う実演や，今後はインターネットを授業内で活用していくことで，最新の情報を提供できるようになることも話された。

●第 2 回 2013 年 9 月 20 日（金）10:00〜11：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：寺西研二　准教授（大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
・授業題目：『発変電工学』
・共催：工学部 FD 委員会
・内容：この授業では，新エネルギーに分類される各エネルギーによる発電方法について，発電の仕組みと物理的な原理を，図や例えを交えながら説明されていた。また，演習問題を解く時間を取り，学生に質問を投げかへながら，問題を解く手順を説明して，宿題としてレポートを毎回課している。自由討論では，授業時間内に計画通りの範囲を説明するための工夫の仕方が話し合われた。その中で ISC ツールを利用して，学生に予習を促すことで，授業時間内の説明時間を短縮し，一方で学生とのやり取りを行う時間を確保するなどの方法が共有された。また，学生の集中力を維持させるための話し方や，説明の仕方について，声の強弱や内容にメリハリを付けるなどの意見交換が行われた。学生のアンケートからは，「深い理解を得ることができた」，「内容が興味深い」といった記述が多く見られ，学生の深い学びが促進されていることが分かった。

●第 3 回 2013 年 11 月 22 日（金）16:30〜17：50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：田口太郎　准教授（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
・授業題目：『まちづくり入門』
・共催：総合科学部 FD 委員会
・内容：この授業は，まちづくりが私たちの生活と密接に関係しており，まちづくりについて考えることが生活を良くしていくことに繋がるという考え方のもと実施していた。まちづくりに関する実際の事例について，パワーポイントスライドで写真を多用しながら紹介し，まちづくりで大事なことや，日々の生活との関連を具体的に話されていた。先生が現在取り組んでいる研究や，また授業・レポートに対する先生の思いも語られていた。自由討論では，授業中に学生が考える時間を確保する方法について話し合われた。グループで話し合う時間を設けることやレポート課題に取り組む時間配分などの具体的な意見交換が行われた。学生アンケートからは，先生の熱意が伝わっていることや，先生が紹介する事例が，学生のまちづくりに対する興味付けにも繋がっていることが伺えた。

●第 4 回 2013 年 11 月 25 日（月）16:30〜17：50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：溝渕啓　講師（大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
・授業題目：『基礎機械製図』
・共催：工学部 FD 委員会
・内容：この授業では，機械工学科の学生が在学中に必ず身につけなければならない，機械製図の基本について詳しく説明されていた。説明の際には，立体を平面図に描く際に注意すべきことを，模型を用いて解説していた。単元ごとに重要度を示したり，演習問題を出して学生に回答させたり，学生が製図を描くことができるような工夫をされていた。自由討論では，学生の分からない所や質問を聞き取るための工夫の仕方について話し合われ，ミニッツペーパーを利用することや課題の出し方などのアイデアが共有された。また，同じ科目を担当されている機械工学科の先生方も多数参加されており，専門的な内容や演習問題を実施する時間配分についても，アイデアや課題の意見交換が行われた。

●第 5 回 2013 年 11 月 27 日（水）14:00〜15：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：吉田稔　講師（大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
・授業題目：『情報数学』

・共催：工学部 FD 委員会
・内容：この授業では，知能情報工学科の学生が必要とする情報数学のうち基礎となる内容を，取り扱っている。パワーポイントスライドと板書での説明を使い分けながら，例えや具体例を用いて，数学的な概念を説明されていた。また Moodle を用いて，講義ノートや演習問題を受講生が自由にダウンロードすることができ，復習ができるように工夫されていた。自由討論では，教えなければならない内容をうまく学生に伝えるための時間配分や授業構成について話し合われた。演習問題や学生の理解度を確かめるためのチェックをするために，体系的に問題設定しておくと，学生の理解を高め，授業構成にメリハリが出るという意見が出された。学生のアンケートからは，例えや具体例があることで，難しい概念の理解が促進されていることが伺えた。

●第 6 回 2013 年 12 月 9 日（月）16:30〜17：50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：安原由子　講師（大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）
・授業題目：『看護技術Ⅲ』
・共催：医学部 FD 委員会
・内容：この授業では，2 つの目標を提示し，①筋肉注射の部位，②筋肉注射の投与方法についてパワーポイントスライドで詳しく説明されていた。特に，注射部位では臀部模型を使ったり，投与方法では DVD 映像を流したり，視覚的な記憶が次に続く演習に残るように工夫されていた。宿題を課し，その答えを学生に問いかけることで双方向型の授業も心がけていた。自由討論では，授業中に学生に問いかけする際に，親近感を出すための工夫が話し合われた。また，注射の投与方法については，講義より後の演習の中で詳細な説明を行うことが良いのではないかといった意見が上がった。授業で DVD 視聴の際に，パソコンの調子が悪く，5 分ほどロスタイムがあったため，機器に関して，事前の調整を行っておくことが望ましいといった意見が挙げられた。

●第 7 回 2013 年 12 月 16 日（月）16:30〜17：50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：山口鉄夫　准教授（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
・授業題目：『ウェルネス総合演習』
・共催：総合科学部 FD 委員会
・内容：この授業では，学生が自分たちで調べてきたことを発表していた。また，発表に対するコメントを，前もって指名した学生から得ていた。学生との間で質疑応答が頻繁に行われており，いきいきとした授業になっていた。学生が発表に使ったスライドをもとにして，その内容について解説を加えることで授業がより深まりを増していた。授業で用いられた画像や映像は，学生の興味を引いていました。他にも，この授業を受講している工学部の学生にとって重要だと思えることを明確にし，強調していた。　学生へのアンケートからは，動画や画像が多いことを学生は歓迎しており，実際に身体を動かしながら行う授業をありがたく感じていることが伺えた。

●第 8 回 2013 年 12 月 20 日（金）16:30〜17：50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：青矢睦月　准教授（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
・授業題目：『プレートテクトニクス』
・共催：総合科学部 FD 委員会
・内容：この授業では，プレートテクトニクスについて理解することを目的にしており，文系の学生にも理解できるように説明を工夫されていた。地震波の観測から地球の内部構造を解析する考察など，難しい概念を図や写真を多く用いて，丁寧に説明されていた。授業の終わりには，毎回小テストを実施して理解度を確かめている。また，同時に質問やコメントを記入してもらい，出された意見については，次の授業の冒頭でフィードバックを行っている。自由討論では，学生が受け身にならないようにする工夫について，意見交換が行われた。小テストの分割や，導入の際にグループで問題点について話し合うなどの意見が挙げられ

た。また，授業のレベル設定についても討論が行われ，学生に予習をさせる仕組みや，補助教材の活用などの意見が出された。学生アンケートからは，分かりやすい，興味深いといった意見が多くみられ，先生の熱意が学生に伝わっていることが伺えた。

●第 9 回 2014 年 2 月 24 日（金）10:30〜11:50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ（大学開放実践センター3 階）
・授業担当者：佐藤　裕　准教授（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
・授業題目：『心理学入門』
・共催：総合科学部 FD 委員会
・内容：この授業では，心理学が社会の中でどう活かされているのかを学ぶことで，広く心理学を理解できるようになって欲しいとの思いで授業を行っていた。授業は，前回の授業から出てきた質問事項に丁寧に答えることから始まり，その後用語解説や，心理学の基本概念を多くの例を盛り込んだ説明を行いながら進めていた。その際，穴あきのパワーポイント配布資料を使用しているところが特徴として挙げられる。また，授業終了時間直前には，その日のまとめのプリントを配布し学生に記入させていた。学生のアンケートからは，学生からの感想をきちんと読み，質問に対して丁寧に答えてくれることを学生は喜んでいる様子が伺えた。その他に，穴埋めのパワーポイント配布資料が有用であること，穴あきの部分に適切な語句を記入するために十分な時間をとってくれることを歓迎していること，カラーの配布資料，生活に身近な具体例が多くあることで難しい概念の理解が促進されていることが伺えた。

5. FD・SD セミナー

FD・SD セミナーは日常的な教育活動の中ですぐに役立つ知識，スキルを参加者間で共有すること，また教育・学生支援に関するテーマについてディスカッションを行うことを目的に開催している。会場は，いずれも大学開放実践センター3 階の授業研究インテリジェントラボを使用し，徳島大学の教職員，学生だけでなく，SPOD 加盟校の教職員も対象にして実施した。

●第 1 回 FD・SD セミナー（参加者：23 名）
【日時】2013 年 5 月 30 日（木）16：30〜18：00
【テーマ】インドとブラジルの高等教育
【話題提供者】
コインカー パンカジ マドゥカー（徳島大学先端技術科学教育部国際連携教育開発センター）
アントニオ ノリオ ナカガイト（徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
【内容】今回のセミナーでは，近年経済成長著しい BRICs 諸国（ブラジル・ロシア・インド・中国）のうち「インドとブラジルの高等教育」をテーマとした。その経済成長を支えている背景にある教育制度のうち，特に高等教育について両国の特長や日本の高等教育との違いについて話題提供があった。

はじめにナカガイト先生より，ブラジルの教育制度についての説明があった。大学教育については，先生自身の学生時代の経験をもとにブラジルの入試科目や，先生が専攻していた物理学の科目について紹介された。ブラジルでも日本と同様で，教育より研究活動が重視されているということであった。

続いて，コインカー先生よりインドの教育制度や近年の大学数，大学進学率の伸びについて説明があった。インドでは，知識基盤による経済発展を目指しており，高等教育の修了者が経済発展を支えているということである。今後の高等教育の目標や現状における課題などが報告された。

両発表の後には，参加者を交えてディスカッションが行われ，日本の高等教育との比較，共通する課題などが話し合われた。

●第 2 回 FD・SD セミナー（参加者：18 名）
【日時】2013 年 7 月 26 日（金）16：30〜18：30
【テーマ】グループ学習を成功につなげるための考え方と進め方
【話題提供者】
香川順子（徳島大学教育改革推進センター）
【内容】今回のセミナーでは，グループ学習を効果的に進めるための基本的な考え方（協同学習）

について，その要素をおさえた上で具体的な技法を知り，授業に取り込めるアイデアを考えることを目的として開催した。

はじめに，参加者は 4 人 1 組のグループを作り，グループ内で決められた時間の中で自己紹介と他己紹介を行った。ここでは，他者の話をよく聴き，それを記憶，理解して説明することの難しさなどを体験した。同時に，話す時間を設定することの意義や，学習者一人一人がいつ学習状況を確認されても答えられるように，一人ひとり責任を持って参加してもらう方法とその意義について説明があった。

次に，アクティブ・ラーニングの定義や，深い学習と浅い学習についての説明があり，それに関連して参加者自身の学習体験を振り返り，グループで話し合った後，学生の記憶に残りやすい学習方法についてアイデアを共有した。グループへの貢献度によって提供されるシール（報酬）についての説明もあった。

これらの体験を通して，協同学習の 5 つの要素について説明され，ジグゾー法を用いた学習の説明もあった。その他，マインド・マップ，クリッカー，大福帳などの学びを促すツールについての紹介もあった。セミナー全体を通して，グループワークを成功へつなげるためのさまざまな方法が盛り込まれていた。

●第 3 回 FD・SD セミナー（参加者：12 名）

【日時】2013 年 11 月 8 日（金）16：30〜18：30

【テーマ】学習者の学習意欲を高めるためのインストラクショナル・デザイン入門

【話題提供者】

仲道雅輝（愛媛大学総合情報メディアセンター）

【内容】今回のセミナーでは，インストラクショナル・デザインの考え方を用いて，授業設計を行う方法について，話題提供及びグループワークが行われた。授業を設計する際には，授業の目的を設定し，到達目標や授業方法などを設計していくが，特に学生の動機づけを，授業の中でどのように行うのかについて検討することも重要になる。セミナーでは，動機づけを行う際のモデルとして，フロリダ州立大学のケラー教授が提唱した「ARCS モデル」と同大学のガニエ教授が提唱した「9 教授事象」が紹介された。グループワークでは，実際の授業において，学生の学びを促進した事例をもとにして，ARCS モデルを用いた分類を行った。続いて，参加者が自身の授業を振り返り，行っている動機づけについて，ARCS モデルを基に分類した。分類をすることで，各参加者の授業における動機づけの特徴が現れ，今後の授業設計のヒントに繋がったと考えられる。

●第４回ＦＤ・ＳＤセミナー（参加者：18 名）

【日時】2014 年 1 月 24 日（金）16：30〜18：00

【テーマ】図書館を利用した学修支援の実践における成果と課題

【話題提供者】

佐々木奈三江（徳島大学附属図書館利用支援係）

亀岡由佳（徳島大学附属図書館雑誌情報係）

【内容】今回のセミナーでは，2014 年 4 月より徳島大学附属図書館本館において実施が始まった，学習相談 Study Support Space（以下，SSS）の取り組みについて，実績の紹介と学習支援の今後の展望について報告とグループワークが行われた。SSS は，ピア・サポート活動を行う学生と図書館職員との協働によって行われており，運営スタッフから依頼を受けた，大学院生や教職員がアドバイザーとして，決められた時間帯に図書館のピア・サポートルームで待機し，学生の学習に関する相談に対応ものである。

はじめに，佐々木氏より SSS の取り組みについて，実施に至った背景，学習支援を図書館としてどのように位置づけているのか，SSS の実績などが紹介された。SSS は 2014 年 4 月から 12 月の期間で，314 名の相談者が訪れ，特に初年次学生に利用されているということであった。続いて，亀岡氏の進行のもと，図書館で実施できる学習支援について，グループワークを行った。参加者は，次の 5 つのテーマに分かれて，テーマごとに新しいアイデアを出し合った。グループワークのテーマは，「①学生・教員との連携」，「②イベント」，「③資料活用」，「④授業開発」，「⑤共同研究」であった。各グループから

は，教員と協同した初年次教育の開発やライティングセンターの設置などの意見が挙げられた。本セミナーでは，今後の徳島大学における学習支援において参考となるアイデアが出された。

6. 大学教育カンファレンス in 徳島

・会期：2013 年 12 月 26 日（木）9：15〜18：00
・会場：徳島大学大学開放実践センター
・概要と成果：第 4 期全学 FD プログラムの最終年（第 3 年目）に当たる今年度の徳島大学 FD 委員会主催の教育カンファレンスは，昨年に引き続き「大学教育カンファレンス in 徳島」として四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）の開催行事として実施し，徳島県内の他大学・高専からの発表者も加わり行われた（表 3）。今回の実施は，昨年度と同様に，後期授業期間中の 12 月に大学開放実践センターを会場として開催した。口頭発表 17 件，ポスター発表 15 件があった。その内，ポスター発表 2 件は学外からの発表であった。また，学生を発表筆頭者とする口頭発表が 4 件あった。午前中の口頭発表とパラレルで，四国学院大学の仙石桂子助教と本学の国際センターの Gehrtz 三隅友子教授によって「教育にインプロをとりいれてみよう―インプロを体験するワークショップ―」が行われた。

今回の特別講演として，同志社大学 PBL 推進支援センター長の山田和久教授による講演が「PBL（Project-Based Learning）の学習効果と質的向上を目指して―同志社大学プロジェクト科目（公募制・教養教育）の試みから―」と題して行われた。また，昨年度に引き続きラウンドテーブル形式による発表 1 件があった。テーマは，「徳島県内の高等教育機関におけるアクティブ・ラーニングの取り組み」，話題提供者として，学外から 2 名（鳴門教育大学の山森直人准教授，阿南工業高等専門学校の長谷川竜生准教授）と，本学の大学開放実践センターの金西計英教授の 3 名により行われ，それぞれの発表のあと全体での質疑応答があった。今回の全体の参加者は，学外からの参加者 18 名を含む，135 名であった。すべての発表終了後に情報交換会を開催した。

7. ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

a. ねらい

実質的な FD の取り組みを進めるため，「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を開催した。本ワークショップは平成 23 年度に初めて開催して以来，今年度は 3 回目の開催である。本ワークショップは，教育の質向上及び問題解決のための相互交流と日常的な教育改善のための研修の一つとして実施し，到達目標は次の通りであった。

①個人の教育活動を振り返り，教育理念と教育目的を整理する。
②個人の教育活動を振り返り，教育戦略・方法を整理する。
③個人の教育活動を振り返り，成果と具体的な課題を整理する。
④参加者同士の関係性をつくる。

本ワークショップは，SPOD の FD プログラムであるため，徳島大学教員だけでなく，SPOD 加盟校の教員も参加した。ティーチング・ポートフォリオは，教員個人が教育活動を振り返り，自身の教育理念，教育目的，戦略，方法，成果，課題などを中心にまとめていくものである。参加教員（メンティー）にメンターが寄り添い，話し合いを重ねながら自身のティーチング・ポートフォリオを 3 日間かけて作成する。参加者同士で対話を行いながら，自身の教育活動について 3 日間集中して振り返る作業を行っていくものである。

b. 概要

■開催時期
2014 年 3 月 6 日（木）〜3 月 8 日（土）
■会場
共通教育 6 号館 201 教室（大学開放実践センター2 階）
■参加者

氏　名	所　属	職　名
山本真由美	総合科学部	教授
林　裕晃	医学部	助教
安田武司	阿南工業高等専門学校	助教
施　国恩	全学共通教育センター	非常勤講師

表3　2013年度 全学ＦＤ推進プログラム　大学教育カンファレンスin徳島 プログラム

会期：2013年12月26日（木）　会場：徳島大学大学開放実践センター

8：45 ～ 9：15	受　付　＜大学開放実践センター1 階玄関ホール＞		
9：15 ～ 9：30	学長挨拶　香川 征　＜第 1 講義室＞ *司会：日置善郎*		
9：30～ 10：15	***口頭発表Ａ*** *座長：羽地達次* **〈第 1 講義室〉** Ａ① 9：30～9：45 ■学生討議型授業コンサルテーションの成果と課題～学生の授業に対する取り組み方の変容に注目して～ 教育改革推進センター 吉田　博 他	***口頭発表Ｂ*** *座長：小山晋之* **〈第 2 講義室〉** Ｂ① 9：30～9：45 ■グローバル化社会に向けた大学教養教育 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ 研究部 大橋　眞　他	
	Ａ② 9：45～10：00 ■大学図書館を活用した学習支援の試み～Study Support Space の運営～ 総合科学部 1 年 枝川恵理　他	Ｂ② 9：45～10：00 ■グローバル化社会に向けた国際大学間連携教育プログラム 総合科学教育部博士前期 2 年 ﾁﾐﾄﾞﾙｼﾞ ﾂｫﾙﾓﾝ	
	Ａ③ 10：00～10：15 ■TBL 授業の導入 病院（歯科第 2 補綴科） 竹内久裕 他	Ｂ③ 10：00～10：15 ■e ラーニングシステムを経由して提出された理数系レポートに対する定量的解析 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ 研究部 宇野剛史 他	***ワークショップ*** *座長：金西計英* **＜授業研究ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄﾗﾎﾞ＞** 10：00～12：00 ◆教育にインプロをとりいれてみよう －インプロを体験するワークショップ－ 国際センター Gehrtz 三隅友子 他
10：15～ 10：25	休　憩		
10：25～ 11：10	*座長：上田哲史* **〈第 1 講義室〉** Ａ④ 10：25～10：40 ■2013 年度大学入門講座「読書レポート」報告 全学共通教育センター 古屋　玲 他	*座長：出口祥啓* **〈第 2 講義室〉** Ｂ④ 10：25～10：40 ■新入生による自動滴定装置の設計と製作 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 外輪健一郎 他	
	Ａ⑤ 10：40～10：55 ■大学間連携によるフィールドワーク教育プログラムの開発と実施 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ 研究部　豊田哲也　他	Ｂ⑤ 10：40～10：55 ■大学生による小中学生向けロボット教室の企画運営とその相互評価 工学部 2 年 遠藤光哉 他	
	Ａ⑥ 10：55～11：10 ■地域との連携によるフィールドワーク教育プログラムの成果と課題 地域創生センター 佐野淳也　他	Ｂ⑥ 10：55～11：10 ■プロジェクト活動で得られたこと～our project activities～ 工学部 2 年 松本拓磨 他	

11：10～ 11：20	休　憩		
11：20～ 12：05	*座長：原田健太郎* **〈第 1 講義室〉** Ａ⑦ 11：20～11：35 ■コミュニケーション教育における教育効果の検証方法 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ 研究部　久田旭彦	*座長：阪間 稔* **〈第 2 講義室〉** Ｂ⑦ 11：20～11：35 ■化学実験出張講義および体験イベントにおける高大院連携の試み 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 南川慶二 他	***ワークショップ*** *座長：金西計英* **＜授業研究ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄﾗﾎﾞ＞** 10：00～12：00 ◆教育にインプロをとりいれてみよう －インプロを体験するワークショップ－ 国際センター Gehrtz 三隅友子 他
	Ａ⑧ 11：35～11：50 ■長期インターンシップを利用した産学官連携活動の推進 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 森本恵美 他	Ｂ⑧ 11：35～11：50 ■学習を通じた概念形成～高校復習テストの分析から 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ 研究部 齊藤隆仁	
	Ａ⑨ 11：50～12：05 ■知能情報工学科「ソフトウェア設計及び実験」におけるコンピュータゲーム開発が受講生の就職観に与える影響 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 光原弘幸 他		
12：05～ 13：00	昼 食 休 憩		
13：00～ 14：30	***特別講演*** *司会：川野卓二*　＜第 1 講義室＞ 演題：PBL（Project-Based Learning）の学習効果と質的向上を目指して ―同志社大学プロジェクト科目（公募制・教養教育）の試みから― 講師：山田和人先生　（同志社大学 PBL 推進支援センター長）		
14：30～ 14：40	休　憩		
14：40～ 16：40	***ラウンドテーブル*** *座長：日置善郎* **＜第 1 講義室＞** ★徳島県内の高等教育機関におけるアクティブ・ラーニングの取り組み 鳴門教育大学 山森直人 阿南工業高等専門学校 長谷川竜生 大学開放実践センター 金西計英		
16：40～ 16：50	休　憩		

16：50～ 17：50	***ポスター発表*** *座長：岩田 貴 ＜1階ロビー＞* ●高大連携事業「高校生の大学研究室への体験入学型学習プログラム」実施報告（第5報） P① 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ研究部 渡部 稔 他 ●災害・防災ボランティアへの意識について～授業「災害を知る」を通して～P② 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ研究部 山本真由美 ●教職マインドマップ作成によるキャリア基盤形成の試み～教職キャリアノートを活用した省察の統合化～ P③ 大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部 奥田紀久子 他 ●組み込みシステム応用に基づく実践的な教育研究支援 P④ 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 辻 明典 ●実践を重視した教育研究支援現場における技術スキルの獲得 P⑤ 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 石田富士雄 ●スキルス・ラボにおける海外交流トレーニング P⑥ 大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部医療教育開発センター 岩田 貴 他 ●医療系学生は医療コミュニケーションをどこで学んでいるか P⑦ 大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部医療教育開発センター 長宗雅美 他 ●日本の大学での英語授業としてクリエイティブ・ライティングを教える方法と効果的な資料の作り方についての概要 P⑧ 全学共通教育センター Dierk Guenther ●いかにして学生のモチベーションを維持するか P⑨ 全学共通教育センター（非常勤講師）ギュンター 知枝 ●日本人のための英語プレゼンテーションのガイドライン P⑩ 徳島文理大学 Christopher Pond ●巣立ちプログラムにおける「短期インターンシップ」の実践 P⑪ キャリア支援センター・キャリア教育推進室 山野明美 ●「自主プロジェクト演習」の活動を通して学んだこと P⑫ 工学部創成学習開発センター 三好 遥 他 ●小学生の創作活動を通した理科教育活動への参画 ―少年少女チャレンジ創造コンテスト―P⑬ 工学部創成学習開発センター 北岡 誠 他 ●ティーチング・ポートフォリオ更新ワークショップの試み P⑭ 阿南工業高等専門学校 松本高志 ●インシデント事例から学ぶ人間関係 P⑮ 大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部 岩佐幸恵 他
18：30～ 20：30	情報交換会 **＜生協食堂＞**

表 4　2013 年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

第 1 日（2014 年 3 月 6 日・木曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者
11:30-12:00	受付（共通教育 6 号館 201 教室）＊11:50 までに集合	
12:00-12:30	オリエンテーション ・はじめに　・自己紹介（スタッフ紹介） ・ティーチング・ポートフォリオとは	吉田博（進行） FD 委員長　日置善郎 北野健一
12:30-14:00	アイスブレイク・昼食 ・初稿へ向けての共通アドバイス ・ミニワーク	北野健一
14:00-15:00	第 1 回個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	メンター全員
15:00-17:00	TP 作成作業（＊22:00　初稿提出締切）	
19:00-21:00	情報交換会（任意参加）	

第 2 日（2014 年 3 月 7 日・金曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者
9:00-10:00	TP 作成作業	
10:00-10:30	第 2 回個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	メンター全員
10:30-12:00	TP 作成作業	
12:00-13:00	意見交換・昼食 ・初稿に共通するコメントと情報共有 ・第 2 稿をまとめるにあたって	北野健一
13:00-13:30	第 3 回個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	メンター全員
13:30-17:00	TP 作成作業（＊22:00　第 2 稿提出締切）	

第 3 日（2014 年 3 月 8 日・土曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者
9:00-10:00	TP 作成作業	
10:00-10:30	第 4 回個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	メンター全員
10:30-12:00	TP 作成作業	
12:00-13:00	意見交換・昼食 ・第 2 稿をまとめるにあたって ・より良いメンターになるためには（ワーク）	北野健一
13:30-14:00	TP 作成作業・プレゼンテーション準備	
15:00-16:00	TP 披露・修了式 ・メンティーによるプレゼンテーション ・ワークショップを振り返って ・修了証授与　・記念写真　・アンケート	吉田博（進行） FD 委員長　日置善郎

■運営メンバー

氏　　名	所　　属	職　　名
北野健一*	大阪府立大学 工業高等専門学校	教授
日置善郎	大学開放実践センター	教授
川野卓二*	教育改革推進センター	教授
宮田政徳*	教育改革推進センター	准教授
吉田　博*	教育改革推進センター	講師
上岡麻衣子	教育改革推進センター	特任研究員

＊はメンター担当教員

■内容

3 日間にわたって表 4 のプログラムを実施した。

c. 成果と課題

プログラム終了直後，参加者 4 名に事後アンケートを実施した。各項目に対し，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の 4 段階で評価を行った。

特に参加者全員が「そう思う」と回答した評価の高い項目は,「研修は全体的に満足できるものだった」,「ティーチング・ポートフォリオは自身の教育改善につながった」であり,「教育理念がより明確になった」や「個人的な教育活動について深く考えることができた」などの項目も，全員が肯定的な回答をした。このことから，参加者全員にとって，ポートフォリオ作成による教育活動の振り返りが有意義なものであったことが伺える。

また運営面においても「メンターからの助言は役に立った」や「事務局は手際よく研修を運営した」という設問では，参加者全員が「そう思う」と回答しており,「ワークショップの目的が明確であった」,「ワークショップはわかりやすい順序ですすめられた」などの項目も全員から肯定的な回答を得た。

成果と課題に関連する項目で，上述した項目以外については，次の 3 つの項目について自由記述として回答を得た。参加者から得られた回答すべてを次にあげる。

(1) ティーチング・ポートフォリオを作成したご感想をお聞かせ下さい。

・大変勉強になった。自分自身の教育活動について省察するいい機会になった。参加して良かった。

・自分の授業のやり方を振り返ることができてよかったです。ありがとうございました。

・自身の目標がはっきりしたことは良かった。

・まだ完成していませんし，完成させるのは難しく思っています。まだまだ教員としての経験が要りそうです。

(2) ワークショップに参加して良かったと思われる点を，具体的にお書き下さい。

・自分の授業のやり方を振り返ることができ，他の参加者の方と話ができたことです。

・教育理念をよく考えることができました。また，現状とのギャップもわかりました。

・3 日間じっくりと自分の理念について考えることができた。

・今までの教育活動を振り返ることができた。今後の目標ができた。

(3) ワークショップをよりよいものとするために改善すべき点があれば，具体的にお書き下さい。

・一律のプログラムではなく，できる人には異なるアプローチが合ってもよいと思う（参加者相互のディスカッションなど）。

・ポートフォリオの作成・完成を目指すものだけでなく，作成の開始を目指すものがあっても良いと思いました。

・もう少し簡易な形式になる方が良いような悪いような（改善点といえるかどうか・・・）。

今回のワークショップは 3 回目であり，ポートフォリオ作成による負担をいかに軽減できるかという課題は残るものの，参加者にとっては大変な作業ではあるが有意義な時間であったように感じる。特にメンターとのやり取りの中で自身の教育活動を振り返ることで，自分だけでは気づかなかった理念や目標を発見できているように感じた。平成 26 年度以降は，授業設計ワークショップ（平成 25 年度までの教育力開発基礎プログラム），授業コンサルテーションと共に，教育力開発コースとして体系化されたプログラムとして実施されるようになる予定である。今後は，上述した課題の克服や，参加者への広報を十分に行って行くことが求められる。